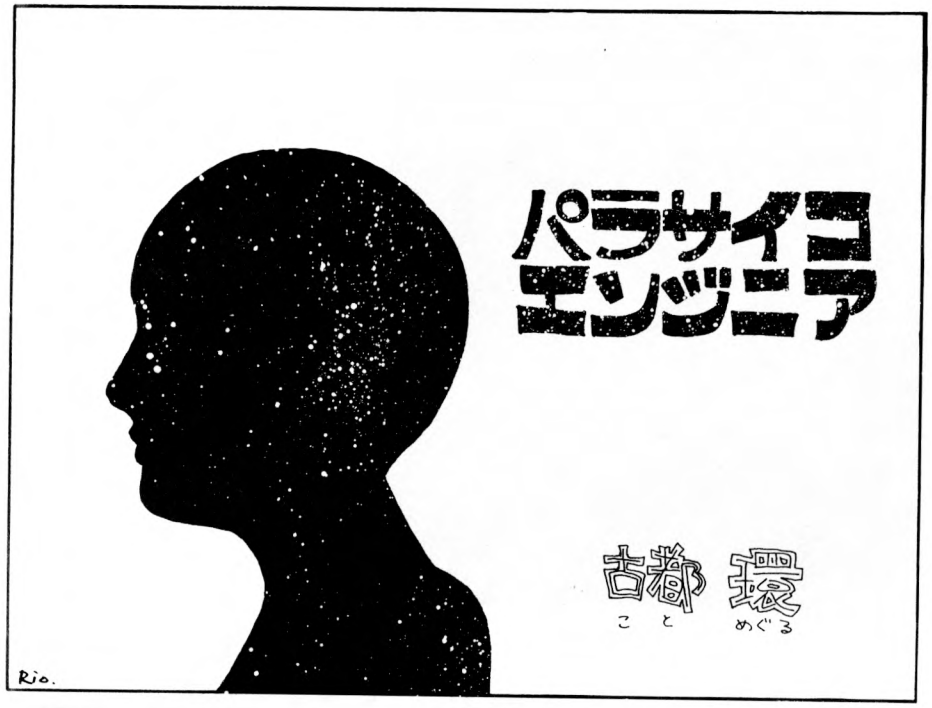


パラサイコエンジニアとは精神科医の超能力の応用を考える人のことである。俗に言うことではない。彼等は超能力を引きだし、能力を発達させる手助けをする。

パラサイコエンジニアが最も重視しているのは認識能力である。そして認識を得たあとの判断力。この二つが同時に行なわれるようにすること、それが第一の目標である。

普通人の認識域が広くなり、それに応じて判断力も的確になってきた人間をニュータイプと言うが、超能力者はニュータイプではない。

パラサイコエンジニアが超能力者を育てる時も、やはり認識力と判断力を重視する。それはパラサイコエンジニアリングの基礎なのだ。

判断力について言えばニュータイプもパラニュータイプもたいして違いはないはずだが認識力は確かに超能力者の方が広くなる可能性が高い。それは超能力の基礎というか基本の能力は超感覚であるからだ。

超能力は「知ることのできること」と

か「五感の延長」または「五官の限界がなくなること」などと数多くの言い方がされているが、パラ達は単に「見ること」と言い表わしている。

この超感覚をもとにして幾多の行動能力がおこなわれると、能力は開化する。精神駆動力しかり瞬間移動しかりである。

能力には数多くのバリエーションがあり、まだ理論上は可能なのに実証されていない能力も沢山あるが、パラのニュータイプの認識域が広がり、事象の細部、本質まで知ることができるようになればその能力も開かれるのではないかと考える研究者は大勢いる。

パラサイコエンジニア達は、能力の開花、応用を考えるのである。いまだ、その能力の原因は理論では数多くあるが、不明としか言いようがない。だが応用ができるのでパラサイコエンジニアなるものが生まれてきたのである。パラサイコエンジニアのはしりで、この名称の生みの親であるサレト・リンゼ氏は念が固有空間をこの世界の外界に形成しそこに生命パターンを刻み込むので能力が可能になるのだと言っていたが真偽は不明である。もっとも彼の考えは理論が形成されていなかったので正しいとは言いかねるのであるが。

パラの基本能力は精神感応による意志伝達と考えられる。それはパラの99%がこの能力を持っていることに裏づけられる。

テレパシーはいかに可能かと言う問がしばしば言われるが、この答もいまだ理論の域を出ていない。脳が関係しているのは確かなのだが、知ることの出来るのはそこまでなのだ。

テレパシー波というものが実在することは計測器によって確かめられ、それからテレパシー波遮蔽スクリーンや対ESPフィールドが発明されもしたが、その実体は不明なのだ。哲学の「実体」と同じように、それは私たちには不可知のものなのだろうか。

テレパシーは読心力と言われるがそうではない。超感覚は確かに人の心の中にまでおよぶが、それだけではどうしようもない。それは人の心の中はカオス状態だからである。もちろん明確な思考や言

葉にするときの思考は大まかには知ることが出来る。だがそれは相手が言葉を使って思考をしている時だけに可能なのである。言葉を聞くよりも思考をたどる方が相手の考えをつかめることは確かなのだが、それすら100%あてに出来るというものではないのだ。もっとも、それで十分と言えば十分なのだが。

普通人やただのパラには読心術は出来ないが、ニューターイプの読心術は正確な意味での読心ではない。その卓越した認識力と判断力での推理にすぎないと言えばそうなのだ。が、それは正確すぎる程の推理だ。もっとも超感覚はそなえていないので、相手を視認でき、できれば五官を全て使用できる位置にいなければならないが。だから、読心術ではなく察相術とか観相術とか呼ばれるのである。ニューターイプも能力の高度な者になると、一度察相をやった人なら、別にその人が視認できない所にいても推理で思考をたどることができる。

ニューターイプの観相術とパラの超感覚によるのぞきとの違いは、観相術ならば思考していない考えも分かるということである。つまり相手が思考していないことや考えてもいないことが、その相手のちょっとした動きや行動などのデーターから、感知することができるのである。だからニューターイプを目の前にしたとき、対ESPフィールドなどないも同然となる。

パラニューターイプ。これはニューターイプがパラになったとか、パラがニューターイプになったとか言われるが、パラサイコエンジニアは気にしない。どっちにしろ能力は同じなのだから。

パラニューターイプは本当の意味での心ができる。ニューターイプの察相・観相に加えて、超感覚で相手の心からもデーターがとれるからだ。彼等の場合、本当に思考する前に、その思考を読みとれるのだ。

パラニューターイプの能力はそら恐しい。それは能力を持たぬニューターイプの比ではないとも言える。確かに今はニューターイプとの差はほとんどないが、パラニューターイプの能力が全開された時はニューターイプを遠く引きはなすだろう。

はたしてパラニューターイプの限界はどこまでなのだろうか。それはまだ能力を全開にした者がいないのでよく分からない。いや、故意に能力を極限まで引き上げないのかもしれない。私の知っている数人のパラニューターイプ（それでも数が少ないので、公認パラニューターイプの半数ぐらいになる）のうち能力のある一線を越えたと思われる人々は一様な変化を表わす。それは彼等の行動、しぐさの中に表われてくる。その一線というものがどういうものかは分かりようがない（彼等はそれを話さないし、シールドする）が、彼等の精神は一様に変化していくのである。どのような変化かは言葉に表わすことは出きないが、彼等の何もかも分ったような穏やかな目や、何もかも認めているような雰囲気を見れば察知できよう。そして彼等は「世界」からはなれる。別に人目にふれなくなるという意味ではなく、なにをしても超然とした雰囲気を発しているのだ。そう、まるで人間の姿はしていても、心は人間を遥かに越えているように感じるのである。だが、それは異質なものではなく、人の心を包含しているものだ。彼等は決して人でなくなったのではない。

もちろん例外はある。例の一線をとうに超えたと考えられる人でも「世界」からはなれない人もいるのだ。あのサルトル・リンゼ氏がそうであったかもしれない。雰囲気は確かに超然としているのだが。これはどう言う意味をもっているのだろうか。

読者は、その一線をパラニューターイプの限界と考えるかもしれないが、私はそうだと断言できない。一線を超えた者はそれ以上能力を伸ばそうとしていない印象を受けるのだ。「この『世界』の存在で所を残すために、この『世界』に居場ありたいために」と感じるのだ。あの「世界」から離れて行ったパラニューターイプにしても時折それが感じられるのである。彼等は何を考えているのだろう。そして何でこの「世界」に残ろうとしているのだろうか。全ては謎である。推理することもゆるされない印象であった。

パラニューターイプに関する話が長くなったが、これはパラサイコエンジニアが今ではほとんどニューターイプかパラニュ

ータイプが占めているのを考えれば、いたしかたない。彼等は目的のない行動はしない。その彼等がパラサイコエンジニアになっているのだ。何か遠大な目的があるに違いない。

私はその目的を推測できるが、今は述べない。読者自身の思考に枠を築くことになるだろうから。

私は古い記録をスクラップしてある。それは、ニュータイプやパラに関したことである。今からその記録を書いていくことにしますが、読者諸君には、そのデータをもとに、自分自身で考えてみることを希望します。また記録の中には、思考を刻みつけたものもあったので、その思考はこの記録集に復写しておきました。ニュータイプやパラの諸君は、それもデータに加えてみてください。

前書きとしては、とりとめのないものとなりましたが、ここで述べておくべきものは全て書いたつもりです。その割りには短いものになってしまったようですが、書きたりなかった所はあとで補足することにします。

筆者

生囚を騒がせたアノ事件・②

「涙の新宿"寒い"事件」

（19ページからのつづき）

さて車内にかけ戻ったが混み合う最終電車の中で荷物を置いた場所にたどり着けぬ千原氏を乗せたまま電車は発車してしまった。件の場所に荷物がない事を確認した彼は代々木上原で上りに乗り換え再び新宿へと戻った。が、仲間の姿はすでになく夜の新宿ネオンの灯り、巡り会う望みもはかなく思え帰る手だてもすでにない。まかせておけという先輩の言葉でここまで来た彼は心細い小銭を握りしめ夜の街を彷うのだった。街角の屋台ラーメンの温かそうなこと。しかし彼はうつむいて通り過ぎる。ほかなかった。十二月の冷たい風は心も体も芯まで凍えさせた。温かいコーヒーカップを手にテーブルを囲む仲間の姿を思い浮かべながら彼は、寒い、とつぶやいた。

どうか お元気で

なにか言っておきたいことばが、あったと思うのですけれど……いざ卒業となるとあっさりしたもので、まるで用事を思い出したように行ってしまうんですね。思い出なんて言葉は、それが終わってしまってからすぐには、あまり似つかわしくないもので。素晴しい人たち、なんてテレくさい、なんとなくほめ過ぎたみたいだけど。今までの何かを始める時には必ずその中心にいた人たちが今年卒業します。僕たちは、時には同じ夢の中にはいり込もうとし、時には反発のことばを投げ、時には妥協の中に苦笑いを満して、そしてまあ適当に楽しくやっていました。

どうか お元気で

★嗚呼、さらば我が星（わらべあきひと）▼25
★クリスマスの夜には（栗沢たかし）▼▼▼▼30
★京子の悲劇（いちごみるく）▼▼▼▼34
●超人たちのプロフィール・その①29
その②33
●細胞具新聞 再び!!37
●一点鎖線のあゆみ41
●チロシマップ・誕生秘話47
●生田創作陣地図48
●SF研生田用語辞典49

嗚呼、さらば我が星

わらべあきひと

愛の星ーこの星がそう呼ばれるようになったのは、百年ほど前からだ。以前は戦争、犯罪、交通事故などが横行し、乱れた世界だった。殺伐とした、砂のような世界だった。

ところが、百年ほど前から一部の民族から"コミュニケーション"を母体とした宗教が生まれ、乾いた砂浜に水がしみ込むように、全世界に侵透していった。

この星の惑はすべて撲滅していった。ずっと平和な世界が続いている。人間同士が生きていくには、完璧な世界といってよかった。

が、しかし本当に完全であろうか？確かに"愛の世界"化して三十年間は、バラ色の世界であった。ところが、最近では、人類は愛に酔い、無気力になっているのだ。愛におぼれすぎて、人類はパワーをなくしていた。不良愛は人間を腑抜けにしていったのだ。もうちょっと愛の星と呼ぶにふさわしくない、快楽の世界だ。

二一〇二年、十二月十日　N街は活

気あふれていた。二週間後にひかえたクリスマスのために　最高に盛り上がっているのだ。

と突然、そんなにぎやかな街に巨大な生物が降ってきたのだ。大音響と共にビルは破壊され、文字通り、降ってきたという形容がぴったりだった。

その生物はそのまま、大きく横たわり少しも動きだそうとはしなかった。墜落した時のショックで死んでしまったのであろうか？

その生物には、大きな体に似あわず、小さな頭がついていた。頭には、2本の角が生え、不思議なことにメガネをかけているのだ。つまり、メガネをかけ、パーマをかけた牛だった。

二日して牛に似た怪物に異変が起き始めた。なんと鼾をかきはじめたのだ。ものすごい鼾だ。

そのまま牛は鼾をかきつづけ、ずっと眠り続けた。

四日目の朝、パーマをかけた牛は突然立ち上がると、やおら歩きだした。落ちてきた時とは違って、別に街を破壊することもなく、舗装された道路を歩いていく。時おり、深く息を吸い込んでは口をもぐもぐ動かしている。

しばらく歩ると、牛は再びしゃがんだ。かと思うと五秒もしないうちに鼾をかきはじめた。

突然の侵入者に対して、この星の人たちは全く抵抗できないのだった。というのも争いもない、この星の人間は戦う術を知らないのだ。危害を加えているわけではない牛でも、存在それ自体が罪になるのに＊＊＊

ところで、巨大な牛が落ちてきたのはこの地域だけではなかった。愛の星全体に十万頭以上落ちてきたのだ。各地域の牛たちもやはり、深呼吸をしては口を動かし、眠る。そしてまた起きてはロをうごかす。いったい牛たちは何をたべているのであろうか？こんな牛の行動が12日間も続いた。明日はクリスマスイブだ。しかし、街はそんな雰囲気ではないのに陽気に騒いでいた。

牛が通り過ぎていった街の住人に不思議なことが起っていた。今まで酒に酔っていた人々に生気がよみがえってきたのだ。これは、いったい＊＊＊

実は、あふれ巨愛や不良愛をあの牛が食べていたのだ。バクは悪夢を食べると云われている。牛が不良愛を食料にしてもおかしくはない。愛というのは少々欠乏しているくらいの方が意味があるのかもしれない。

当然、俺の体にも変化がおきていた。いままで、二日酔のような気分だったのに妙にすっきりしているのだ。というよりは二日酔をしているときは「もう絶対に酒は飲まない」と決心するのに、それが直ってしまうとまた飲みたくなる、ような気分だ。

窓の外に巨大な、眠っている牛を見た俺は、驚かざるをえなかった、と同時に何とかせねばという考えが、脳裡をかすめた。

いったいあの牛は何処から来て、何故に愛を食っているのだろうか。

俺は半ば反射的に部屋の外にでると、鼾をかいて眠っている牛に近づいていった。外は雪が降っていた。牛の上にもふんわりと雪がつもり始めていた。明日はいよいよクリスマスイブなのだ。

腹の下でできく牛の鼾は、すさまじいものだった。地響も起きそうだ。俺は牛のまわりを興味深く歩きまわり、丹念に調べはじめた。実に大きな体だ。俺は思いきり牛の尻をけりあげてみた。牛の皮はイヤになるほど堅いものだった。

俺は、今けりあげた尻のすぐ隣に不思議な記号を見つけた。そこに、ほられてあったのは♡のマークだった。このマークは、牛がどこの星から来たのかを物語っていた。この牛は地球から送り込まれてきたものなのだ。俺のききかじりの知識によると、地球でも一大〝コミュニケーションブーム〟が全世界をおおい尽したらしかった。そのシンボルがこのマークなのだ。俺は何のために巨大な牛が愛の星に送られてきたのか、わかったような気がした。

今度は皮に耳をあててみた。すると体内から何か妙な音がきこえてくる。時を刻む音だ。時限爆弾のように＊＊＊

次の瞬間、牛は大爆発を起していた。当然、各地にいた牛たちも。

俺は目前がまっ白になり、しだいに意識が遠のいていった＊＊＊

クリスマスの夜には

作 柴田たかし

町にはジングルベルが溢れ、その中をいくつものカップルが楽しそうに歩いていた。いつもは寒いはずの十二月、この日だけは誰もが寒さを感じていないようだった。

ぼくはクリスマスが大嫌いだった。いっしょにクリスマスを祝う相手のないぼくにとって、なにもかもがぼくを馬鹿にしているようにしか思えてならなかった。去年のクリスマスの晩と同じように静かなスナックで酒をあおっていた。

ふっとなりに座ってもいいかしら。」

誰かが話しかけてくることを予期していなかった僕はとっさに何を言ってよいのか解からなかった。

つあのう、一緒にお話ししませんか？」

女は少しはずかしそうに聞いた。

「どうぞ。」

ぼくはひとこと言って、改めてその女を見た。ぼっそりとした顔だちで、大きな目が印象的であった。俗にいう美人だろう。

つなぜこんなところで、一人で飲んでいるのですか。」

そう言ってから、ちょっと不吉な事を聞いたと後悔した。

「ただ何となくお酒が飲みたくなっちゃったの。」

「あら、最近は女でも一人で飲みに来る人が増えたのよ。」

つさあ、そんなことより二人で飲み直しましょう。」

女は、ぼくの疑問を軽くかわし、水割りを作り始めた。

水割りの濃さはぼくの好みにピッタリだった。もっとも、その女性の美しさに惑わされた感があるが。

何杯飲んだのだろうか。

さっきまでの不機嫌が嘘のように、ぼくの心はうきうきとしていた。

この女とこのまま別れたくない。一晩をともにしたい、と思った。

つあなたが今何を考えているのか、あててみましょうか。」

つ別に何も考えてないよ。」

そう云ってから思わず照れ笑いをしてしまった。

つ私のアパートに来ない？」

✧ ✧ ✧

ベッドの中で彼女が寝ている。そしてぼくは、そのとなりで静かにタバコをふかしている。そういえばそんな風景をテレビで見たような、きのうスナックで女と出合い、そして……

つちょっとうまくいきすぎかな。」

まさかこの女もぼくがヒュプノだとは気がつかないだろう。女性ときのうのように出合い、そして一夜をともにする。そうなりたいと思うだけで夢がかなう。

ハハハ、またうまくいったな。

つあなた、何か言った。」

ついやなんでもない、きみの寝顔に見とれていただけだよ。」

つそう、なんでもなければいいけど。

今日は二人にとって特別な日なんだから静かに寝ていてね。

つ二人にとって？」

つ今日は二人の命日なの。」

女はためらいがちに言った。

つはいはい、おもしろいことを言う娘だな。二人って、まさかぼくたちじゃないだろう？」

つそう、私たちなの。」

女は胸をシーツで隠し、ぼくの顔を真剣に見つめていた。

「まさかぼくを刺し殺してきみも死ぬなんていわないだろう？」

ぼくは女がそんなことができるはずのないことを知っていた。いまは。

「二人はスナックで知り合い、そして一夜をともにする。このことは一ヶ月も前からわかっていたのよ。そしてこの部屋で二人は死ぬのよ」

「おい、寝ぼけているのかい？」

ぼくは、いや、俺は半分自分に言いきかせるように言った。女の顔はさっきまでのやさしい顔ではなく、目はおれをとらえていたが、俺を見ているのではなくどこか遠くを見ているようだった。

「私は未来が見えるの」

女はポツリと言った。

「まさか、君はなんだ、何者だ！」

そう言い捨てベッドから飛び出した。

「私は予知能力者。あなたは私の予知では今日死ぬことになってるの。逃げようとしてもダメよ。私の予知がはずれたことはないのだから」

「ばかを言うな。俺は、望んでここにいるんだ。死ぬことを案じたおぼえはない！」

「誰だって死のうなんて思わないわ」

「人違いじゃないのか。本当に俺が死ぬのか」

「誰だかわからなかったけど、突然予知の中にあなたの顔があらわれたの」

なんてことだ。これじゃまるでゴキブリホイホイの中のゴキブリじゃないか。

「とにかく俺は帰る！死んでたまるか！」

そう言い捨ててアパートを飛び出した。

・・・・・・・・・

単純な人ね。どうして私の言うことを簡単に信じたのかしら。この世の中に超能力者なんているわけないのに。

会員生態録

超人たちのプロフィール その②

蒲谷(かばや)伸幸

「蒲谷が悪い！」の流行語を生み、全ての悪と不都合を一身に引き受けて、激動の4年間を生き抜いた生田のイエス・キリスト。何かといえば「蒲谷が悪い！」と叫んで自分自身を省みる事をしない連中をあたたかく見守り、朝は駅前の"箱根そば"ですましてしまうという、やさしいヒト。現在、人里離れた所で秘密の仕事に従事。

岬とおる

あの、相模大野にあるS女子大生を震撼させた、泥酔女子大門前事件のヌシ。抜群のセンスで描く彼の表紙やさし絵は、生田支部の出版活動を側面から支え、特にロリータ・コンプレックスが生み出す少女画は人気が高い。またギャンブルにも強く、雀球は必ず打ち止めにした。麻雀・将棋など勝負事については絶えず"攻め"のヒトで、負けっぷりのよさもまた魅力であった。歌唱力も支部No.1で、どんなファッションも着こなし、在学中は口ヒゲなども似合っていて、どーして浮いたウワサがなかったのか、不思議。わらべ・三鬼両氏とは中学・高校の同窓生。現在、住宅会社で上司の似顔描きに熱中。

染沢たかし

岬とおる氏と酒豪の双壁をなす元生田支部長。あのジンクス「支部長を経験すると髪がうすくなる」を証明する生きた標本。将棋・麻雀に優れ、これも岬氏と双壁。将棋においては、「戦術の岬、戦略の染沢」、麻雀においては「ヤミの染沢、リーチの岬、ハコテンわらべは役満に走る」と謂われ、アルバイトに行っても、給料以外になにか必ず頂いてくるという猛者。現在、秘書付きの優雅な月給泥棒。

(カット／かとう くん)

京子の悲劇

いちごみるく

♥♥♥ボク京子ちゃんです。京子は某音学大学の声学科の二年生です。もうすぐ二十歳になります。そして自分で云うのもナンですけど、とってもカワユイ女の子です。学校がお休みの時なんね、よくモデルをしています。（へもち、ちゃんとしたお仕事よ。）知らない男の人から恋文やTELをもらうことも日常茶飯事です。街を歩いていても、いつも男の人に声をかけられるの。だけど全部無視してきました。手紙は即破り捨て、TELは即切り、声をかけられたら逃げます。京子、学校もずっと女の子だけの所だったし男の人に興味ないの。男なんてイヤラシクてキタナラシい動物だからキライです。

ところで話は変わるけど、京子よく金しばりにあいます。夜によく眠れないでウツラウツラとしていると突然体がしびれてくるの。もうろうとしながらも意識はあるのだけれど、手足は動かすことができないし、声も出せないのです。そんな時は眠たいのをがまんして、意志の力ではっきりと目をさましします。そうすると金縛りは解けるの。汗をびっしょりかいてとってもイヤな気分になります。でも金しばりって別にオカルトじゃあないのよ。新聞の家庭欄の健康相談にのってたけど、心配事があってノイローゼ気味になったり、心身共に疲れていたりするとそうなる事があるんですって。だから金しばりだからって恐がる事はないのよ。でも京子みたいに美しくかつデリケートな神経の持主に生まれてくると、いろいろと苦労が絶えません。

♥♥♥ある晩、夜中に目がさめました。京子の部屋は二階で、ひとりで眠っています。京子仰向けに眠ってたみたいです。なんだか肌寒くって目だけで体の方を見ました。そしたらタオルケットがかかっていません。ピンクのスケスケのベビードールきりです。また目だけで窓の方を見たら、もぞもぞと動く黒い影。キャーッと叫ぼうと思ったけれど声が出ません。思わず体を動かそうとしたら体まで動かないの。キャーッともう一度心の中で叫びました。イヤだァ、こんな時に金しばりに会うなんて。黒い影が京子のベビードールを首のところまでまくり上げます。誰かのすね毛が京子のふくらはぎをこすってるみたいです。でも京子ただもう怖くって、恐しくって気持ち悪くって、だけど心の中でそう思うだけで体は何も感じません。キャーッ！ママー！助けてー！と叫ぼうと思ってもやっぱし心の中であせるだけで金しばりはちっとも解けてくれないのです。

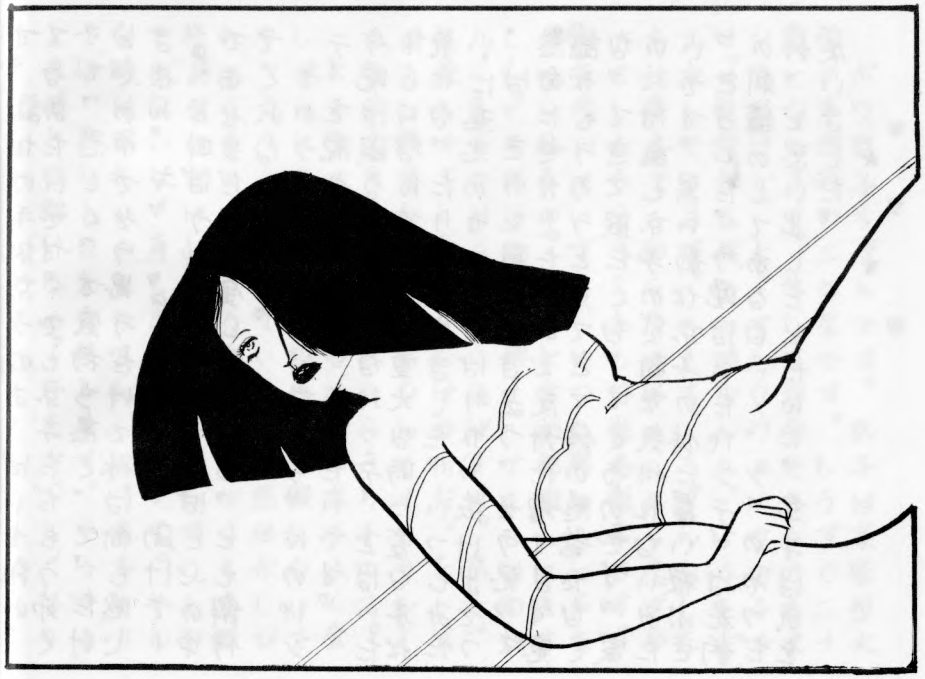
そのうちに黒い影は京子ちゃんのパンティを脱がしにかかったみたいです。今晩は眠る前にどんなパンティをはいたかしらなんて、この重大な時に変な事が気になったりしてきました。いつもみたいに意志の力で金しばりから抜け出そう、はっきりと目をさまそう、そう思って懸命に努力したけれど反対に増すます意識がもうろうとしてきて体の感覚がなくなってきて眠たくなってくるのです。家の人は誰も京子の災難を気付かないみたいです。黒い影が京子の体に覆い被ぶさってきました。今晩はいたパンティは花柄の刺繍のしてある白いメッシュのやつだわっと思い出したとたんに、京子は気を失いました。

★★

朝。目がさめました。ベッドの上で半身起き上がってみると、やけに体がだるくて頭が重い感じ。ひどい宿酔の朝みたい。なんだか悪い夢を見た様な気がして。それがどんな夢なのか思い出そうとしてすぐに。夜中の出来事を思い出しました。くやしくって悲しくって泣きました。ベッドのそばに変な臭いのする小便が落ちてました。

京子。♥ママと警察へ行ってきました。♥中年の刑事が京子の調書をとりました。早く忘れてしまいたいことを何度もくりかえし質問されました。京子が金しばりだと思ってたのは実はクロロホルムの麻酔だったらしい事がわかりました。警察の建物を出たら。よけいにみじめな気持ちになりました。だから京子イヤだっていったのにパパのバカ！京子もうすっかり生きていく気力を失いました。もうすぐ二十歳の誕生日です。その時死のうと思っています。それじゃみなさんさようなら。

薄幸の美少女京子より



細胞具新聞

号外!!

あの狂犬が いま『TO線』誌上に甦る!

卒業生である竹下氏の作品が、本号に載っていないのは非常に残念なことである。彼の軽妙な文章は、SF研としても無視できないものである。そこで、彼が主幹として発行されていた細胞具新聞の抜粋を載せることにする。細胞具新聞の目玉であったスキャンダラスな記事を＊＊＊

五十三年一月二十日　2号より

● 江間氏
↳ 左手なおゆき のこと

あの江間氏もびっくり

先日江間氏が、コンサートで知り合った某女性に電話したところ「今忙しいからダメ」と言われ頭にきて、